

Sibelius 2 (2)

先日 Sibelius2 の発表会で創設者のベン・フィン氏と最高経営責任者のジェレミー・シルバー氏に会って直接話を聞くことが出来ました。

「Finale」との大きな違いは何かという最も皆が知りたがっている質問に対して、ジェレミー・シルバー氏は「機能的に大きな違いはありません」と言った後、「私はロンドンのオフィスまで毎日自転車で通勤しています。同じような機能を持つ乗り物であるとしても一輪車で通勤しようとは決して思いません」と付け加えました。

これは実にうまい喩えです。つまり、どちらも足で漕いで走る乗り物ですが、乗れるようになるまでの練習と、その難しさが全然違うということに喩えたわけです。

確かに Finale は「出来ないことが無い」と豪語するだけの機能が備わっています。(MacOSX 対応機能以外は) 同じような機能は Sibelius2 にも全て備わっていますが、その操作の簡単さが比較にならないほど違うのです。

基本画面は音符入力モード

Sibelius2 では、マウス無しでも殆どの操作が行えますが、「ペンと紙で楽譜を作成する感覚」が売り物の Sibelius2 では、マウスが「ペン」と「手」の役割をします。マウスのシンボルマークは「矢印」と「手」の形の二つですが、矢印は特定の場所を指定する「ポインティング機能」が基本です。例えば音符をクリックするとその音符を編集できますし、五線上の何も無いところをクリックすると、「1. 音符入力モードの時は音符がその場所に入力される」「2. 音符入力モードでないときはその小節が選ばれる」という動作をします。これを Finale で置き換えますと、音符アイコンの音符入力モードを選ぶか自動車のアイコンの小節編集に切り替えるということになります。Sibelius2 では、テンキーが5種類のセットに切り替わる事を前に述べましたが、どのセットでも選ばれているボタンが青く(この色が Sibelius2 のイメージカラー) になっていればその記号がマウスクリックでその場所に入力できます。勿論このセットの切り替えやツールバーの操作やメニュー操作はワープロやその他のソフト同様マウス操作で出来ます。

音部記号を書いたり拍子記号を書いたりするとき Finale ではト音記号アイコンや拍子記号アイコンを選んでからその場所をクリックし、続けて何回でも別の場所で同じ操作が可能でした。Sibelius2 では、にしたい操作を先に選んでからマウスでクリックするという点ではまったく同じですが、「続けて同じ操作をしない」ことを前提に考え、「入力後は自動的に音符入力モードに戻る」という振る舞いをして

す。

考えてみれば、Finale のユーザーはこのアイコン切り替えが結構煩わしいので折角切り替えた機会に「ついでに」同じような作業をやってしまうということをやっているように思うのです。

その点 Sibelius2 では、何かちょっとした作業でも用が済めば常に音符入力モードに自動的に戻りますので「戻るという操作」が無いだけ操作が簡単になっているのです！

このちょっとした作業は入力中にしょっちゅう起こることですからその度に「戻る」操作をしなければならないのは馬鹿げています。

音符入力時でも、まとめていくつかの音符を処理したり、コピー・ペーストをしたいときもありますが、そんな時はわざわざツールアイコンを切り替えなくても、選ばれている音符ボタンをもう一度クリックして音符入力モードを一時休止してその他の動作をさせることができます。

例えば、いくつかの音符を入力していて同じ音型がその後ろにも何力所か使えると気が付けば、その音型を選んで(通常1小節単位で選ばれるが、開始音をクリックしてシフトキーを押しながら最終音を選べば特定の音だけを選ぶことも出来る) 一般的なショートカットキーである ctrl+C でコピーができます。

驚くのはこれを別の場所にペーストしたときです。1小節が選ばれた時はそのまま同じものがペーストされますが、一部だけをコピーしたときは残りの拍も1小節全部同じパターンでペーストされてしまうのです。おそらくこれはマニュアルに出ていない裏技なのかも知れませんが、伴奏形の増殖入力には非常に便利です。

このようなマニュアルでは紹介されていない機能の殆どは音楽家であるベン・フィン氏自らの経験と多くの音楽経験豊かなユーザの声を反映させたもののようなのです。



写真左から
ベン・フィン氏
筆者
ジェレミー・
シルバー氏